九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

島原城下絵図翻刻稿（5）「肥前国嶋原城図」

西田，博

https://hdl.handle.net/2324/4486295

出版情報：pp.1-34, 2019-07-05
バージョン：
権利関係：

島原城下絵図翻刻稿⑤

「肥前国嶋原城図」

―― 付 寛文 8 年島原城請取関係史料 ――

目　次

１．はじめに …… ２
２．「肥前国嶋原城図」基本データ …… ３
３．「肥前国嶋原城図」翻刻 …… ５
４．「肥前国嶋原城図」語註 …… １３
５．「肥前国嶋原城図」解説 …… １６
６．【翻刻】寛文８年島原城請取関係史料 …… ２０
７．参考史料・文献 …… ３３
８．あとがき …… ３４

2019 年 7 月 5 日

西田　博

１．はじめに

寛文 8(1668)年 2 月 27 日、島原藩主高力隆長（高長）は改易【註１】となり、その 3 日後には島原城の請取【註２】にあたる大名が以下のように決定され、2 か月後の 4 月 27 日、島原城の請取が無事行われた（長屋 2009,104-05 頁）。

上使　松平備前守　（隆綱、相模玉縄藩主）【註３】…目付 森川小左衛門（之俊、目付）
請取　小笠原内匠頭（長勝、豊前中津藩主）　…目付 内藤新五郎　（正方、使番）
〃　松浦肥前守　（鎮信、肥前平戸藩主）　…目付 内田伝左衛門（守政、書院番）

中津藩・平戸藩が作成した島原城請取関係の文書・記録・絵図類は現在に至るまで豊富に伝世するが、本稿で紹介するのはこのうち、中津藩（のち播磨安志藩）重臣犬甘（いぬかい）家に伝わったと考えられる「肥前国嶋原城図」および、中津藩の本藩にあたる小倉藩に伝わった「城内え御供之覚」・「島原城引渡諸道具帳」・「弓鎗鉄砲之帳」・「武具馬具之帳」の翻刻文である。

「肥前国嶋原城図」は、島原城請取の際の、中津藩主・重臣の動きや隊列の構成などが記され、近世初期における城請取仕法の一側面を知ることができる。また、島原城下絵図として最も初期のものの一つであり、高力氏時代の島原城下の様子を語る好史料である。

「城内え御供之覚」は、島原城へ入城する中津藩主小笠原内匠頭長勝に随伴する家臣ら、および彼らが担当する門番所の書き上げであり、前述の「肥前国嶋原城図」を読み解く上で欠かせない史料である。そして「島原城引渡諸道具帳」・「弓鎗鉄砲之帳」・「武具馬具之帳」は、寛文 8 年 5 月 1 日の武器引き渡しに先立って高力家家老より上使側へ渡されたもので、これにより寛文 8 年当時の、島原城における櫓・門の名称や収納物、管理について、その一端を知ることができる。

【註１】改易の理由は公的には「高力左近大夫え被　仰出趣」に記される通りである。以下に全文を翻刻・引用する。「左近大夫領知仕置悪敷、非分之課役申掛、土民令困窮／之由、国廻り并浦廻り面々領内之輩数多訴之非分之通／も無紛之趣、右之面々帰参之上、及言上、島原之儀は為亡／所之処故、方々より百姓集令住居様ニ父摂津守ニ被仰付／従　公儀御金米被下、取立之処、在々所々痛候様ニ仕、其上／家中仕置等不宜下ヲくるしめ候、其身侈極候之段、重々不／届ニ被　思召領地被召上、松平亀千代ニ御預、嫡男伊／与守酒井左衛門、二男右衛門真田右衛門ニ御預候者也。」（「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」）

【註２】うけとり。近世における用字は専ら「請取」、歴史学上の用字は通例「受け取り」。城持大名が改易された後、幕府から委任された大名・旗本が、改易された藩の家臣から引渡しを受ける形で、城や城中の武具・馬具・武器・諸道具・米・金銀銭などを収公すること。改易された側の家臣が籠城するなど、抵抗を試みる可能性があるため、委任された大名・旗本は臨戦態勢で請取に臨んだ。

【註３】「大河内正信」または「松平正信」として知られる。松平伊豆守信綱と同じ家筋である。

２.「肥前国嶋原城図」基本データ

■東京大学史料編纂所≪書目データ≫

【書目ＩＤ】00067573
【史料種別】貴重書（特殊蒐書）
【請求記号】内務省引継地図-内務省引継地図-0340
【書　　名】肥前国嶋原城図（内題）
【著 者 名】
【出版事項】
【形　　態】1
【注　　記】旧番号：０３９４－　－３８.
別　名：嶋原城図　犬甘本（表紙題箋）.
年　代：高力左近大夫隆長時代.
その他：手書き，着色，表紙あり，表紙に「播磨採訪」の題箋あり，
図中に「３９４／３８」の鉛筆書きあり.
兵庫縣播磨宍粟郡安志村 犬甘政懋所蔵.
９３長崎県．肥前国.

■その他のデータ

形　　態：畳物（表表紙・裏表紙あり）。
法　　量：77×104cm（展開法量）。
25.8×18.4 cm（畳物表表紙）。
景観年代：寛文 8(1668)年。
作 成 年：不詳。
作 成 者：不詳。

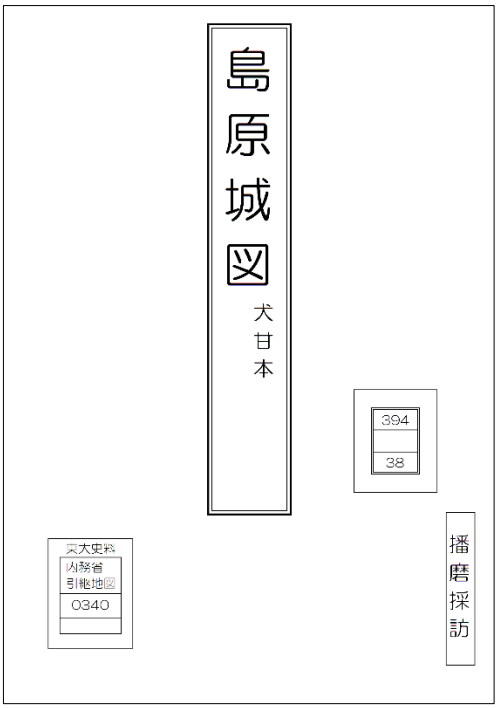
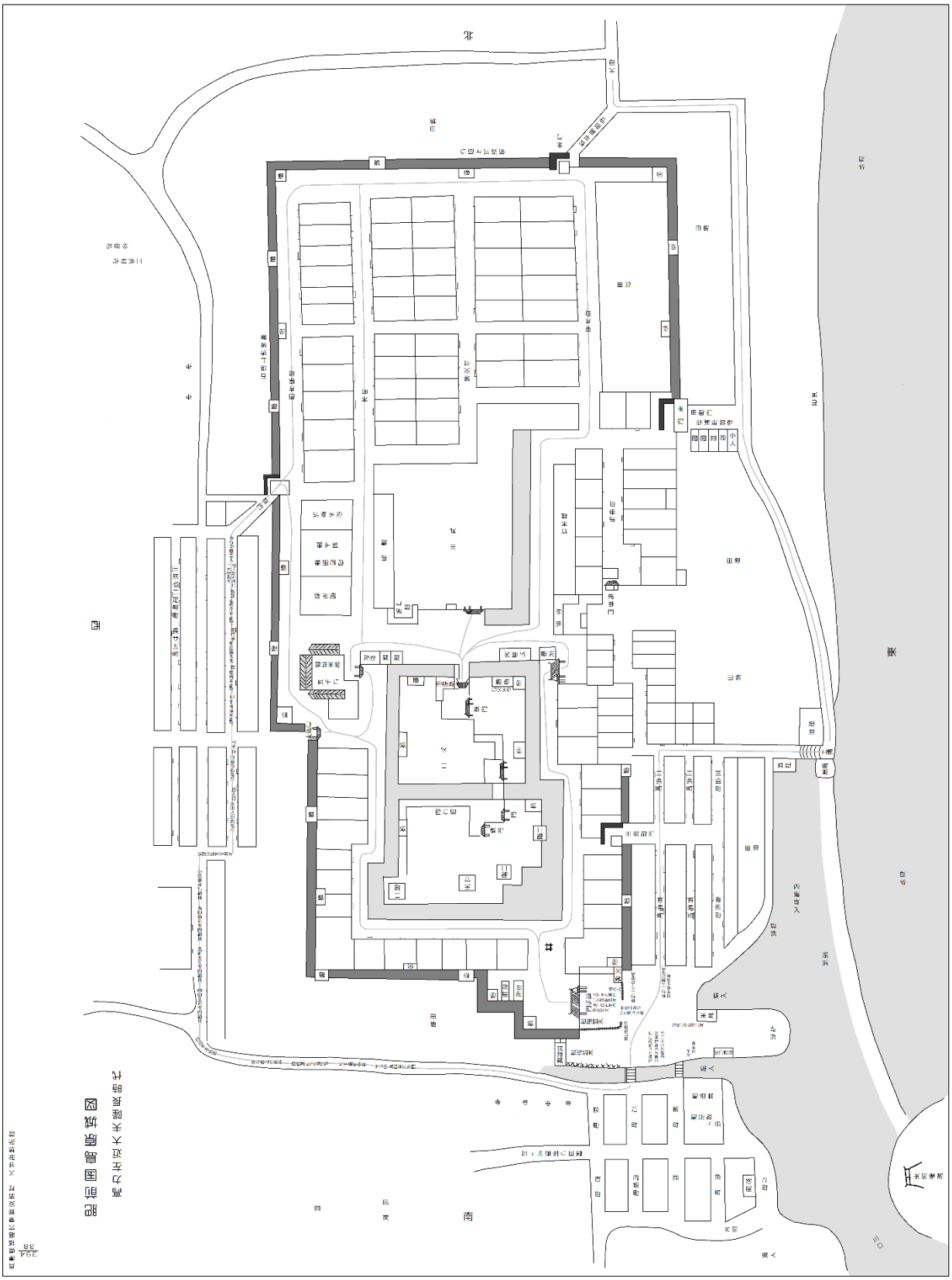


図１　畳物表表紙トレース・翻刻図

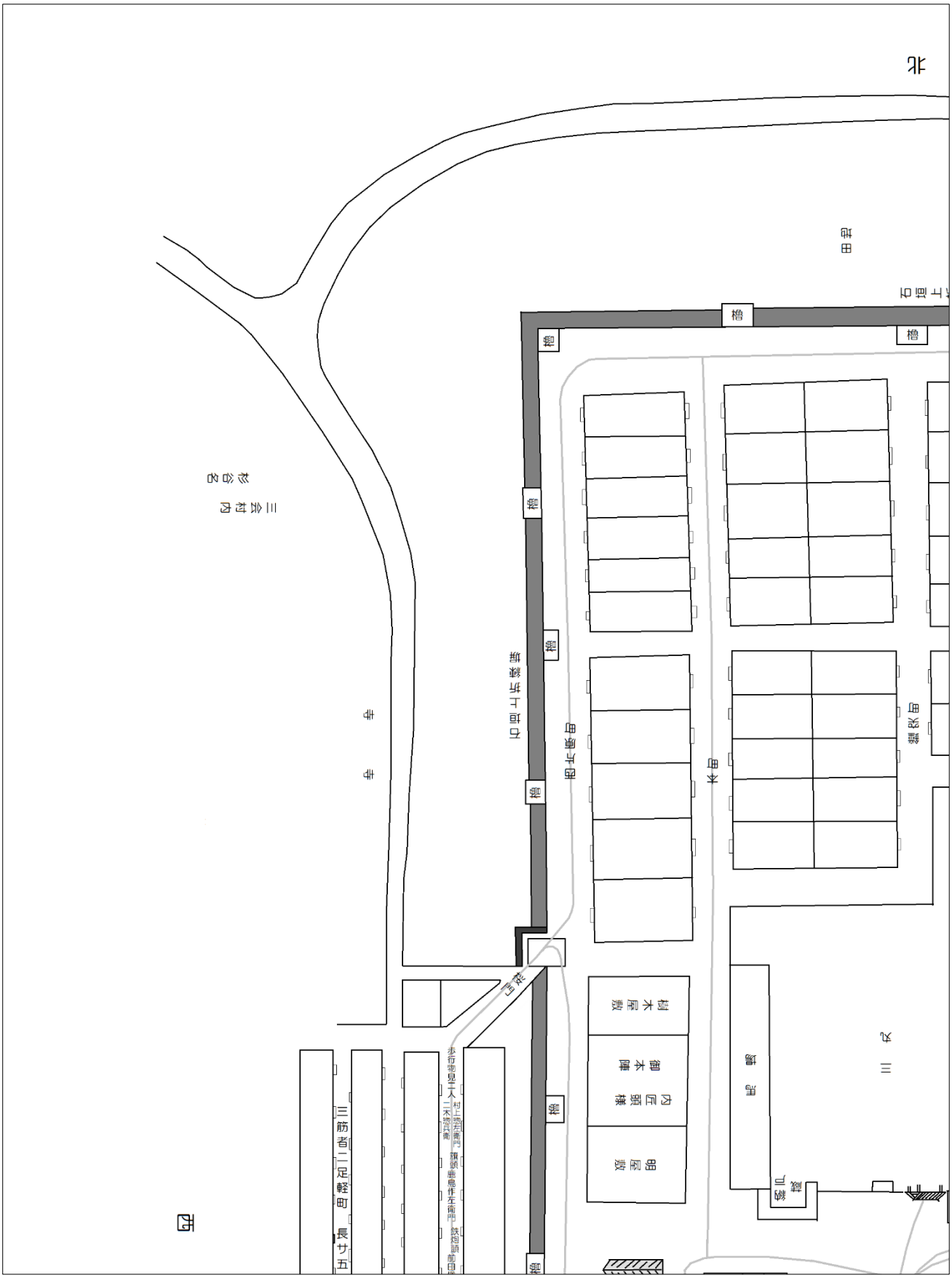
年	月	日	事　　績	出　典
寛永 15 (1638)	4	13	島原の乱後、高力忠房、島原城主となる。17 年後の明暦元（1655）年、子の隆長が家督を継ぐ。	林 1954,1016 頁。
寛文 6 (1666)	7	13	高力隆長、家老志賀玄蕃允(甚三郎)を手討ちにす(2 年後の改易の理由の一つと言われる)。	林 1954,1017 頁。
	9	7	中津藩主小笠原長勝、江戸城にて家督の礼を行う。家老犬甘半左衛門政和もまた将軍家綱に拝謁す。	「笠系大成十　長次／長勝」
寛文 8 (1668)	2	27	評定所において、高力隆長に改易を申し渡す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	2	30	老中ら、島原城請取にあたる上使・目付・請取大名・在番大名の決定を伝える奉書を発給す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	3	5	老中奉書、大阪に到り、大坂城代ら、上使・目付・勘定方・城請取大名について確認する連署状を発給す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	3	15	福岡藩主、長崎奉行の内意を受け、長崎の各番所にて厳戒態勢を取るべく、家臣を長崎に派遣す。	川添ほか 1982,326 頁。
	3	19	上使・城請取大名・在番大名あてに将軍下知状(黒印状)を発給す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	3	19	上使からの城請取についての問い合わせ 16 ヶ条に対し、老中ら返答す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	3	22	城請取のため、陣道具・石火矢・扶持米等を積んだ中津藩の船が中津を出船す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	4	2	中津藩主、2 名の家臣を内情視察のため島原へ派遣す。	「笠系大成十　長次／長勝」
	4	14	中津藩先立、中津を出陣す。中立は翌 15 日、供立は 16 日に中津を発す。香春にて小倉藩より加勢あり。	「笠系大成十　長次／長勝」
	4	24	上使が諫早に到着、上使の宿所へ城請取大名 2 名が伺候す。	長屋 2009,104 頁。
	4	27	上使・城請取大名 2 名、島原城を受け取る。	長屋 2009,104 頁。
	4	29	長勝、小倉藩より加勢の人数を小倉に返す。	「笠系大成十　長次／長勝」
	4	30	高力家家老、諸道具・弓鎗鉄砲・武具馬具の書き上げを提出す。上使側、城内金銀を改める。	「笠系大成附録十九 長勝肥州島原城受取之次第 下」
	5	1	高力家家老、武器類を引き渡す。	長屋 2009,105 頁。
	5	6	城請取大名、高力家家臣より「古き事共」を聞く。	長屋 2009,105 頁。
	5	7	城請取大名、所持の絵図と上使より到来の絵図の比較などを行う。	長屋 2009,105 頁。
	5	14	城請取大名 2 名、城門の鍵引渡しについて確認する書状を在番大名あてに発給す。	「笠系大成附録十九 長勝肥州島原城受取之次第 下」
	5	21	上使・城請取大名 2 名、在番大名へ島原城を引渡し、島原を出立す。	長屋 2009,105 頁。
	5	25	中津藩主、中津に帰城す。	「笠系大成十　長次／長勝」
	6	5	中津藩の船が中津に帰着す。	「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」
	6	19	上使ら江戸に帰府、将軍家綱に拝謁す。	経済雑誌社 1902,647 頁。
	10	5	中津藩主、江戸に到り、将軍家綱に拝謁す。家綱、その労を称す。	「笠系大成十　長次／長勝」
寛文 9 (1669)	6	8	将軍家綱、福知山城主松平主殿頭忠房を召し、島原転封を命ず。	林 1954,1017 頁。
	9	18	松平忠房、初めて島原城に入る。	林 1954,1017 頁。

表１　島原城請取関係年表（おもに中津藩関係）

３．「肥前国嶋原城図」翻刻　※次頁以下に拡大部分図を掲載



※東京大学史料編纂所所蔵「肥前国嶋原城図（内題）」より作成、以下同。


北
西
橋
橋
橋

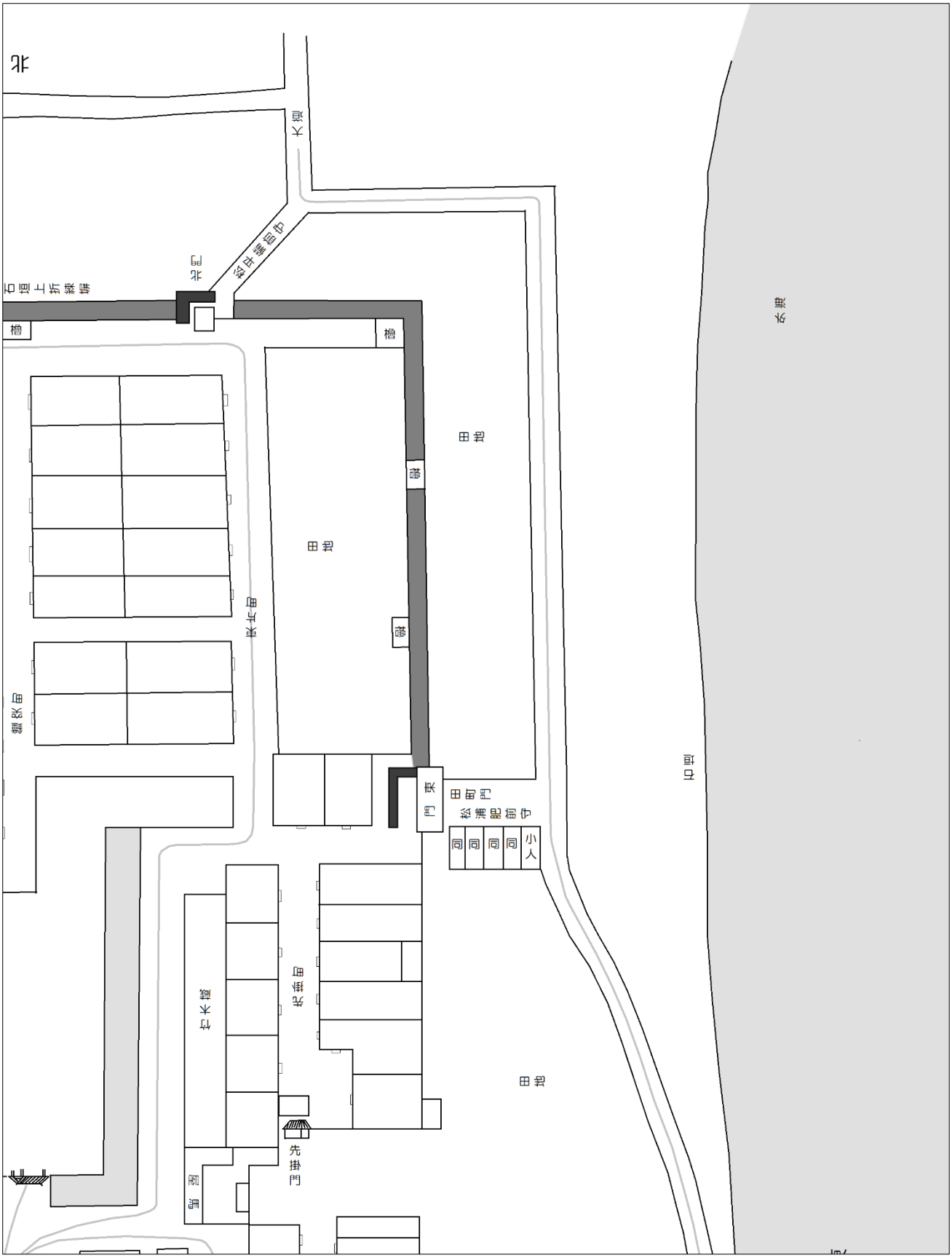

御多
堀中
田
田
田
田
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
北門
石垣上折線構
中宿書中交
道大
北
田沼濠
田北沼
田御先
先掛門
長門
小人
同
同
同
同
同
松平伯耆守
田沼玄蕃頭
田沼意次
蔵米方
馬場

図３　翻刻図部分（北東部）

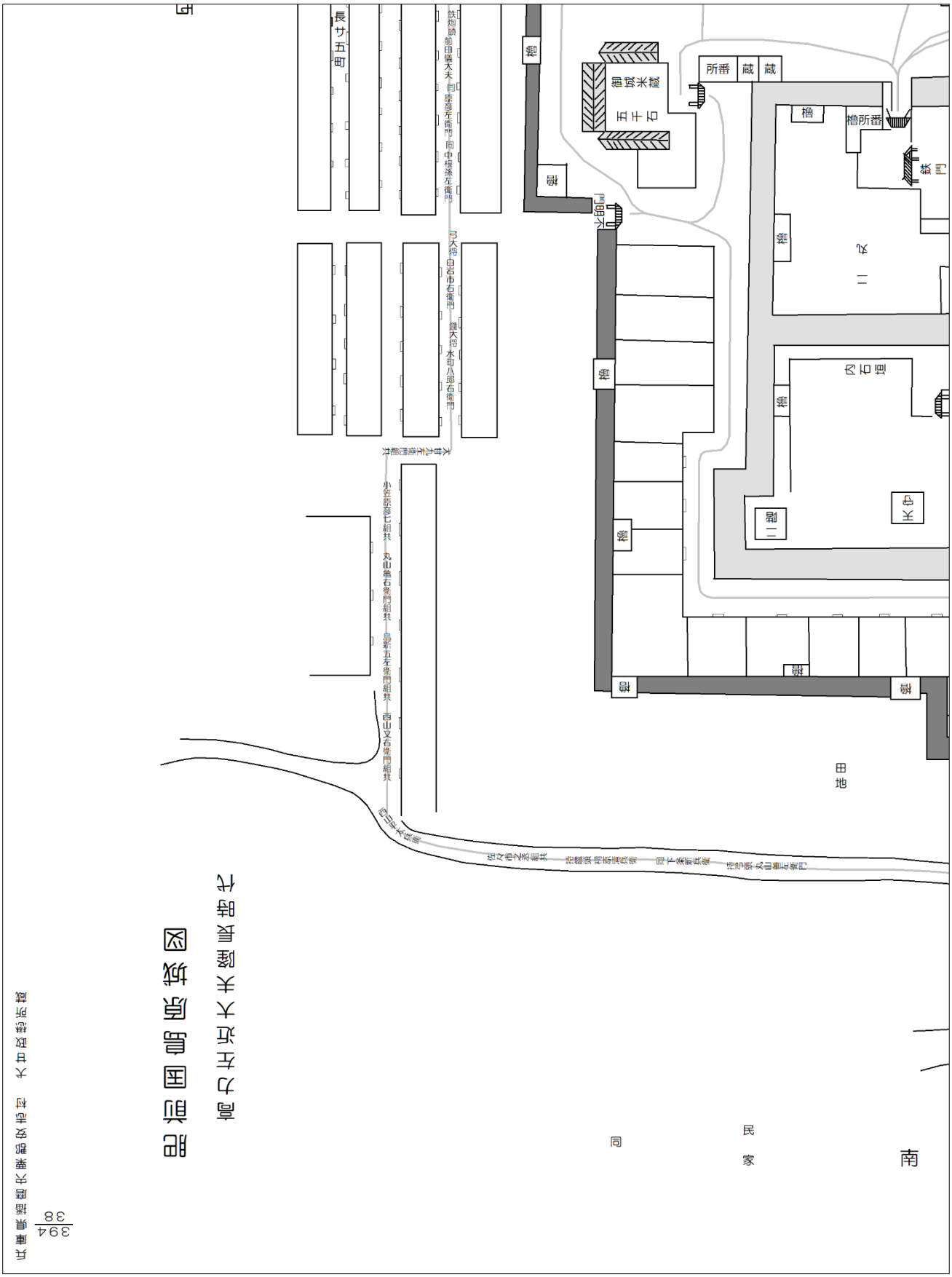
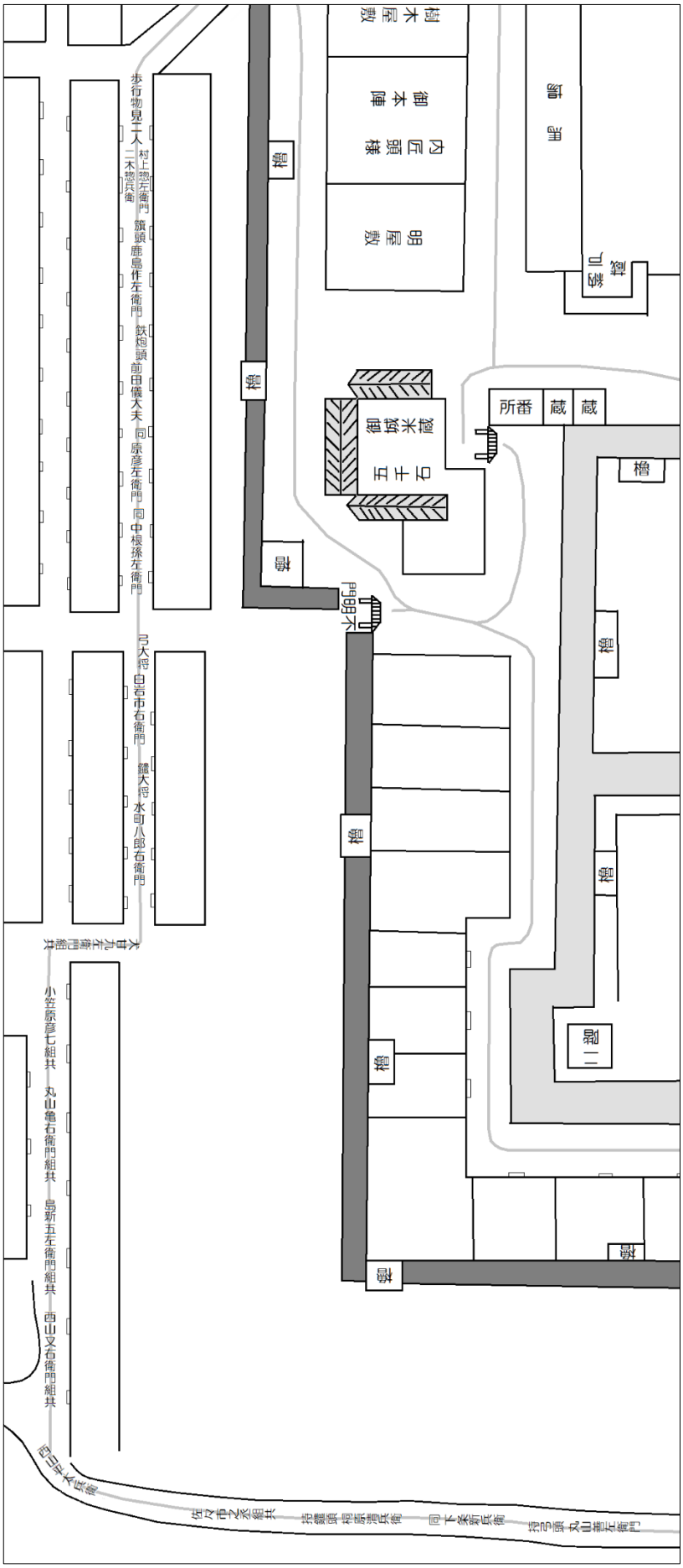
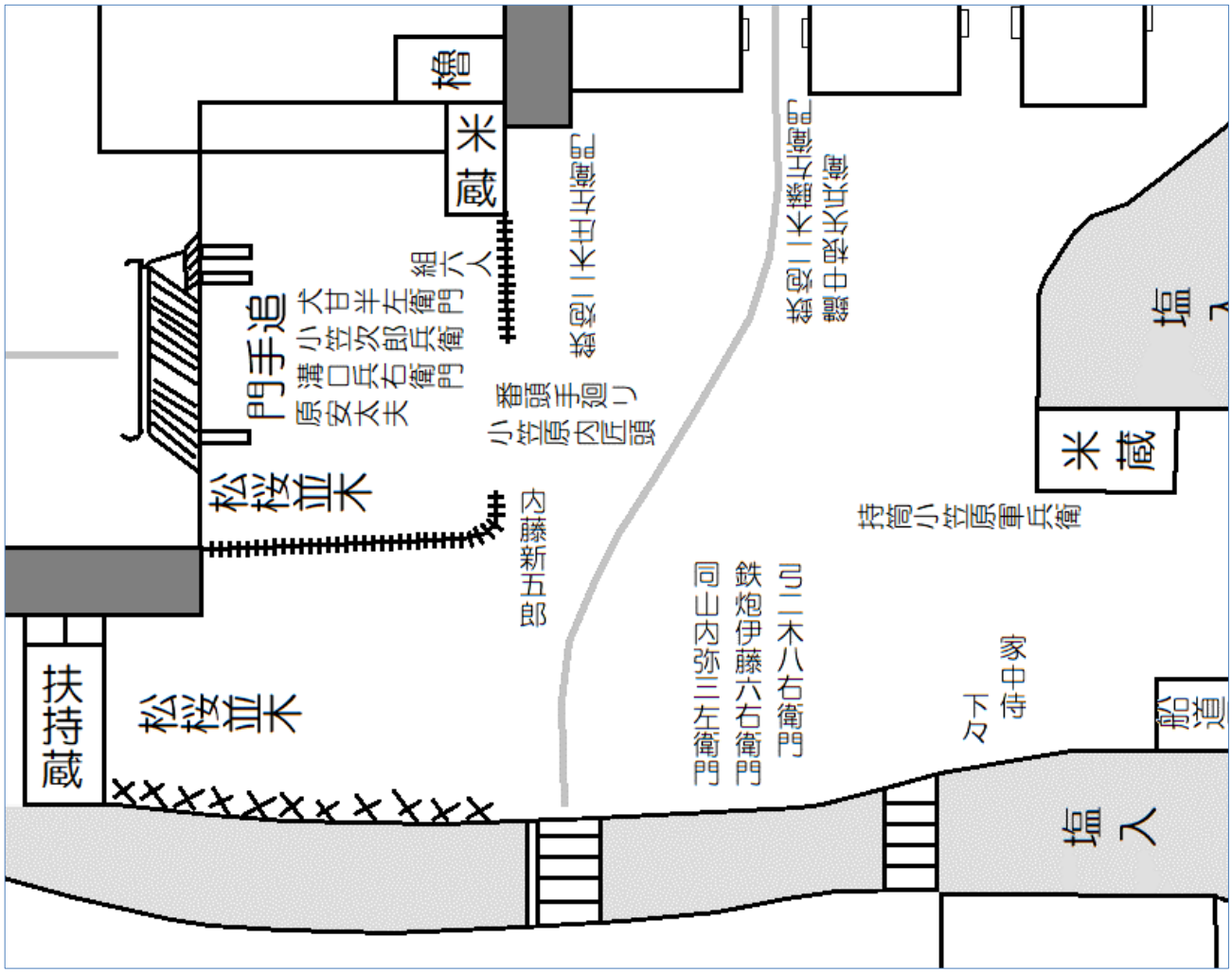

肥前国島原城図
高力左近大夫隆長時代
394
38
蔵所番
蔵
蔵
御撰米蔵
五千石
橋所番
橋
鉄門
二ノ丸
内石垣
中ノ丸
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
櫓
門
長サ五町
南
民家
同
田地

図４　翻刻図部分（南西部）

東
南
客屋敷
番所
番所
石火矢
櫓
鉄門
櫓
門
鉄門
櫓
二階
二階
櫓
櫓
三谷町門
田地
田地
池蓮
土橋
島橋
五社
有馬町
有馬町
有馬町
内海塩入
塩浜
塩浜
塩入
米蔵
塩浜
塩入
船場倉庫
櫓
米蔵
門手倉
松樹並木
松樹並木
扶持蔵
櫓
屋敷
所番
櫓
寺
寺
寺
寺
新町
万町
校町
船道具
船屋敷
上敷
魚町
同
内堀町
中町
片町
片町
漁人
三口
東照權現

図５　翻刻図部分（南東部）


御城米蔵
五千石
所番
蔵
蔵
馬場
檜
檜
檜


櫓
米蔵
門手追
大甘井左衛門
小笠次郎兵衛門
溝口兵右衛門
原安太夫
組六人
番頭手廻り
小笠原内匠頭
内藤新五郎
扶持蔵
大井孫
大井孫
鐵砲中間
鐵砲中間
鐵砲中間

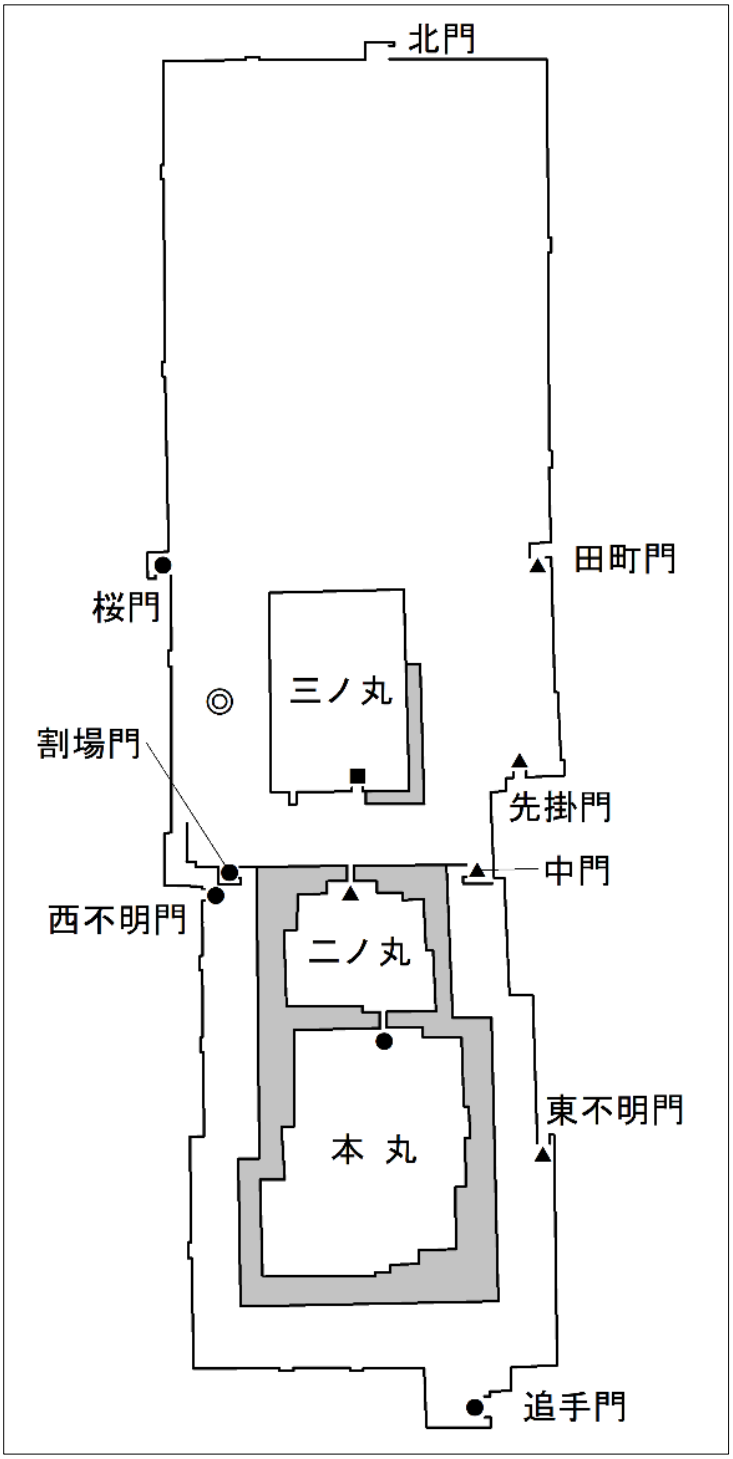


図８　中津藩・平戸藩請取番所見取り図
（「長勝肥州島原城請取次第 下」・「嶋原之城図」より作成）

《凡例》

●…中津藩請取の番所（本丸・西不明門・割場門・桜門）

◎…中津藩小笠原内匠頭本陣

▲…平戸藩請取の番所（二ノ丸・中門・先掛門・東不明門・田町門）

■…中津藩・平戸藩日替り勤番

４.「肥前国嶋原城図」語註

【 あ 】

不 明 門　…西不明門。不明門（あかずのもん）とは「普段は閉ざしている門」をいう。「島原聞見閑録」は西不明門について次のように記す。「不祥門とも云う。常に大門は閉めて、小門のみ開くあり。家中の葬送の時通る門と云う。番人一人。」（野村 2003,243 頁）。

明 屋 敷　…あきやしき。人の住んでいない屋敷、または建物のない宅地（『日本国語大辞典』）。

足 軽 町　…鉄砲足軽やその他の軽輩の武士が居住した町と考えられる。

安 志 村　…あんじむら。享保元年（1716）年、中津藩主小笠原家は播磨国へ領地替えとなり、宍粟（しそう）郡安志村に陣屋を置いた。

石 火 矢　…いしびや。大砲。

樹木屋敷　…樹木は「うえき」と読んだらしい（『日本国語大辞典』、『古事類苑』植物部二）。恐らくは椿等の園芸植物を栽培・鑑賞するための一区画であろう。なお、三ノ丸の北に置かれた時期もあった（「島原之城図」・「本朝城絵図」）。

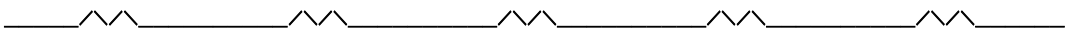
内　　海　…湾内の海。⇒外海。

内 掘 町　…肥前堀町。慶長 19（1614）年に有馬氏が日向へ転封となったのち、北目は大村藩が、南目は佐賀藩が預かることとなり、日野江城および原城は内田舎人・鍋島七左衛門・多久長門が、島原村浜城には綾部左京と中野甚右衛門が定番として入った。その後、浜城防禦のために堀を掘り、土手を築いたが、その際、堀を「肥前堀」と名付けている（国書刊行会 1970,591 頁）。恐らくはこれに由来する町名なのであろう。

追 手 門　…大手門。城の正面の門。

小笠原内匠頭…小笠原内匠頭長勝（おがさわら たくみのかみ ながかつ、1646～1682）。豊前中津藩主。城請取を務めた。

折 練 塀　…塀の一部を折って斜め方向からの攻撃を容易にした土塀。下図は島原城の例。



※上から見た図。上が城外側、下が城内側（「嶋原之城図」による）。

【 か 】

片　　町　…通り筋の片側のみ家屋敷が立ち並ぶ町。片側町・片原町・片平町と同義であろう（柳田 2015,144 頁）。

鐘 突 町　…鐘つき小路（「島原城廻之絵図」）。

北　　門　…諫早（口）門。

客 座 敷　…来客を接待するための座敷か（『日本国語大辞典』）。

客　　屋　…使者屋（「島原城下図」）、「御使者屋鋪」（「森岳城図」）とも。幕府の役人や他藩からの使者が島原を訪れた際、その使者あるいは随行員が宿泊・休憩するための施設。藩側から重臣や役人が出向いて饗応にあたった（島原市教育委員会 2008,17,202,235 頁;同 2010,5 頁;同 2011,98,187 頁）。比定地については西田（2017a）を参照。

鉄　　門　…くろがねもん。扉へ鉄の筋鉄（すじがね）を渡し、角鉄具などを拵えた造りの門（『古事類苑』居処部）。

高力左近大夫隆長…または―高長（こうりき さこんのたいふ たかなが、1605～1677）。島原藩主（1655～1668）。寛文 8(1668)年 2 月 27 日改易。

小　　人　…こびと。江戸時代における職名。雑役に従事した。

五　　社　…寛永 7(1630)年以前の創立。大神宮・八幡宮・天満宮・春日大明神および、不明の一社を祀る（西田 2018b）。

【 さ 】

先 掛 門　…さきがけもん。先魁門・先蒐門・先懸門とも表記する。

塩　　入　…潮入。しおいり。海の近くの川などに海水が流れ込むこと。また、その場所。

塩　　浜　…塩田。

塩　　屋　…濃縮した海水をさらに煮て、塩を作るための小屋。釜屋ともいう。松平忠刻は城下巡見の折、塩屋に立ち寄り、塩釜を見学したという（入江 1972,279 頁）。

御 城 米　…幕府が譜代大名に命じ、軍事・飢饉に備えて貯蔵させた米穀。島原藩の場合、5000 石を御城米蔵に収納した。（島原市教育委員会 2013,79 頁；入江 1972,306-7,313-4 頁；「島原城廻之絵図」）。

新　　町　…城下町の草創期以降に町立てされた町。

外　　海　…湾外の海。⇒内海。

【 た 】

鷹　　島　…鷹島社。西田(2018b)を参照。

　町　　…ちょう。長さの単位。60 間。6 尺 5 寸間で約 118m。

鉄 砲 頭　…鉄砲隊の長か。

東照権現　…徳川家康を祀った社。現在の霊丘神社。ただし絵図作成当時の正確な立地は不明。西田(2018b)を参照。現在、島原市弁天町 2 丁目。

【 な 】

納 戸 蔵　…（藩主個人の）金銀・衣服・調度を収めた蔵か（『国史大辞典』「納殿」の項）。

西片原町　…⇒片町。

【 は 】

蓮　　池　…のちの御手洗池（「肥前島原之城図」）。この場所はもと、陸繋砂州と本土に挟まれた湾の一部であったが、その後、土橋の構築によって池となり、さらに湧き水が流入していたため水は真水へと転化したと考えられる（西田 2018b）。なお、城下町の周縁部にあり、城下防御の一端を担った池が蓮池と呼ばれた例を筆者はいくつか確認している。

旗　　頭　…旗頭。侍大将の意か。

馬　　場　…三ノ丸の西にある馬場。「桜馬場」と称される、追廻しの馬場である（「御在城割場御人数建場絵図」）。

番　　所　…番所の多くは城門に付属する門番所。門番の詰所であり、また往来を監視した。

東 片 町　…⇒片町。

東　　門　…田町（口）門。

扶 持 蔵　…扶持米を支給するための蔵か。

船 道 具　…ふなどうぐ。和船の運航・碇泊などに必要な道具。操舵具・帆走具・櫓櫂・碇・綱具など（『日本国語大辞典』）。

本　　町　…本小路（「島原城廻之絵図」）。都市の中心の町、最初にできた町（『日本国語大辞典』）。

【 ま 】

松浦肥前守…松浦肥前守鎮信（1622～1703）。肥前平戸藩主。城請取を務めた。

松平備前守…松平備前守隆綱（松平正信または大河内正信とも）（1621-1693）。相模玉縄藩主。上使を務めた。

三会町門　…東不明門。絵図作成当時は「三会町門」と称され、実際に使用されていたことが窺えるが、その後、「不明門」となる（「島原城之図」）。⇒不明門。

持 鑓 頭　…藩主直衛の鑓隊の長か。

持 弓 頭　…藩主直衛の弓隊の長か。

【 や 】

櫓　　…一般に土蔵造りで耐火性に優れ、武具・馬具・諸道具などを収納した（23-31 頁）。

鑓 大 将　…鑓隊の長か。

弓 大 将　…弓隊の長か。

【 ら 】

籠　　屋　…牢屋。追手門内の番所近く置かれた。

５．「肥前国嶋原城図」解説

「肥前国嶋原城図」は、島原藩主高力隆長の改易をうけて行われた島原城請取（寛文 8 年 4 月 27 日）の様子を、中津藩側の視点で描写したものである。以下に詳しく見ていきたい。

１．桜門より入る隊列

請取前日の 4 月 26 日、島原城に近い方から中津藩勢（三会村）、平戸藩勢（大野村）、玉縄藩勢（神代村）が宿陣した（図９、太田 1978,23 頁）。そして未明から翌朝にかけて、恐らくは中津藩・平戸藩・玉縄藩の順で島原城下へと軍勢を進めたであろう。中津藩勢は城の東方から南方、西方へと回り込み、先頭の歩行（かち）物見が桜門前に到着、隊列を整え、その後、中津藩主・重臣らの本隊が追手門前で整列、後続の平戸藩勢・玉縄藩勢の到着を待ち、あらかじめ定めた刻限になってから一斉に入城したものと思われる（図６・図１０）。

桜門へと向かう隊列は、歩行物見 2 名の後ろに、籏頭・鉄砲頭 3 名・弓大将・鑓大将、その後ろに中津藩勢の大隊、そして持鑓頭・持弓頭が続く。

２．追手門より入る藩主・重臣ら

中津藩藩主・重臣ら本隊は追手門より入城した（図７・図１０）。重臣 4 名が藩主に先立って城に入り、藩主があとに続く。重臣にはそれぞれ 2 名～6 名の与力らが随伴した。「犬甘半左衛門」の脇に「組六人」とあるのは犬甘半左衛門に随伴した大熊十郎右衛門・秋本只右衛門・沢渡専右衛門・宮本源七・佐々木左次右衛門・武久半兵衛を指すのであろう（21 頁）。

藩主小笠原内匠頭長勝には警護を担当する番頭手廻りが付く。また、幕府から派遣された目付、内藤新五郎も同道する【註１】。

藩主の両脇に控えるのは城内諸門を担当する家臣である。追手門を担当した弓二木八右衛門・鉄炮二木庄左衛門・鑓中根矢兵衛、桜門を担当した鉄炮山内弥三左衛門、（西）不明門を担当した鉄炮二木藤左衛門、（割場）門を担当した鉄炮伊藤六右衛門、本丸を担当した持筒小笠原軍兵衛らで、いずれも組の者が続いて入城した（22 頁）。図中に「家中侍下々」とあるのはその組の者たちであろう。

請取は寛文 8 年 4 月 27 日。このとき追手門・東門（田町門）・北門（諫早門）が同時に開門され、中津藩・平戸藩・玉縄藩の軍勢が一斉に入城したという（廣田 2017,61 頁）【註２】。

【註１】上使松平備前守隆綱には森川小左衛門が、小笠原内匠頭長勝の相役、松浦肥前守鎮信には内田伝左衛門が目付としてついたと思われる（経済雑誌社 1902,647 頁;廣田 2017,60 頁）。なお、入城時に内藤新五郎が手にしていたであろう絵図が、寛文 8 年 5 月 21 日より在番を務めた稲葉家に伝世している（島原市教育委員会 2016,122 頁）。

【註２】開門の時刻は「辰巳ノ中刻」であったという。これは「辰ノ刻と巳ノ刻の中間」（午前 9 時ごろ）の意であろうか。このとき中津藩勢の数は 4390 余人であったという（「播磨安志小笠原家譜」）。なお、入城後のことは、廣田(2017)61 頁に詳しい。

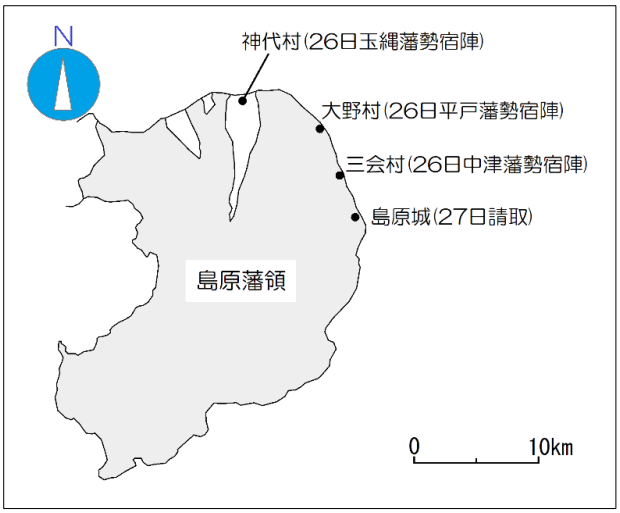


図９　島原城請取前日の諸藩宿陣所

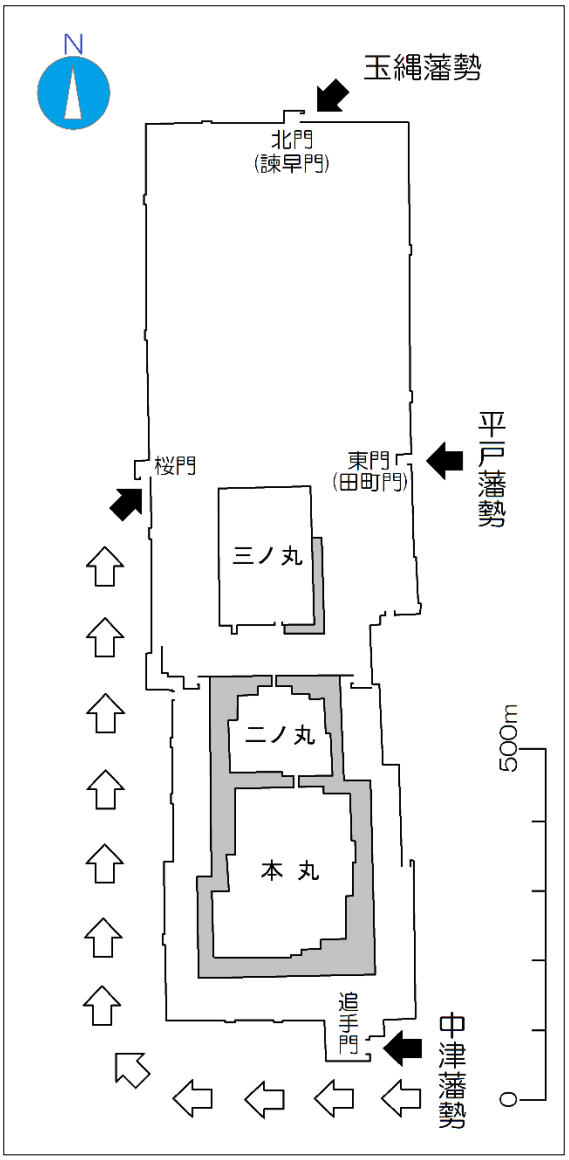


図１０　島原城請取時の諸藩の動き

３．小笠原内匠頭長勝本陣

絵図には「内匠頭様本陣」も図示される（図６・図８）。小笠原内匠頭長勝請取の番所は、追手・本丸・西不明門・割場門・桜門の各番所であるから（図８）、郭内のうち南・西方面を担当したことが分かる。そのなかでも主郭部（本丸・二ノ丸）への入り口や左近殿居屋敷（三ノ丸）に近い屋敷地を本陣としたのであろう。あるいは担当する本丸に本陣を構えた場合、平戸藩担当の二ノ丸を通らなくてはならないから、それを憚ったのかも知れない。なお「本陣」という言葉からも、城請取が臨戦態勢で臨む性格のものであったことが分かる。

４．東門（田町門）

東門からは平戸藩主、松浦肥前守鎮信が入城する（図１０）。松浦肥前守鎮信請取の番所は二ノ丸・中門・先掛門・東不明門・田町門であった（図８）。

５．北門（諫早口門）

北門からは上使である玉縄藩主、松平備前守隆綱が入城する（図１０）。

６．絵図作成の主体・時期

平戸藩勢や玉縄藩勢の入城については藩主の姓・受領名を記すにとどめる一方、中津藩勢の入城については主だった家臣の名まですべて書き入れ、幕府から派遣された目付の名も記すなど詳細に

いたる（図６・図７）。絵図作成の主体が中津藩であったことは明らかであろう。さらに、追手門前の「犬甘半左衛門」の脇にのみ「組六人」と注記することや、絵図旧蔵者の姓が「犬甘」であることから(3 頁)、小笠原家家老、犬甘家の作成にかかり、ゆえに犬甘家に伝来した可能性もある。

作成の時期については不明であるが、各藩勢がそれぞれどの門から入城するかを取り決めたのが寛文 8 年 4 月 24 日であるから（長屋 2009,104 頁)、同日以降の作成である。請取は 4 月 27 日であるから、この 4 日の間に作成された①入城経路予定図なのかも知れない（ただし、当該期の史料であれば、他藩の大名の姓・受領名のあとには必ず「様」を付けるであろう)。あるいは②入城後に作成された記録、または③後世になって編纂された図などが考えられる。

小笠原家譜の附録である「笠系大成附録」は、冊子 45 巻、画図 5 枚から成っていたが【註１】、画図 5 枚のうち 1 枚は「島原城之図」とされる【註２】。また東京大学史料編纂所には、「肥前国嶋原城図」のほかにも犬甘政懋旧蔵にかかる絵図が２点あるが、その２点のうちの１点である「肥前有馬陣取図　犬甘本」は、「笠系大成附録」の画図 5 枚のうちの 1 枚であったことが明らかである（表２)。いまだ確証を得ないが、「笠系大成附録」の画図 5 枚のうちの「島原城之図」が、いつの時代にか散逸して犬甘家の所蔵となり、「肥前国嶋原城図」なる史料名が新たに付されたのかもしれない。

旧 番 号	0394-　-**38**	0394-　-**39**	0394-　-**40**
書目ＩＤ	67573	67563	67572
史料種別	貴重書（特殊蒐書）	貴重書（特殊蒐書）	貴重書（特殊蒐書）
請求記号	内務省引継地図-〃-0340	内務省引継地図-〃-0330	内務省引継地図-〃-0339
表紙題簽	「島原城図　犬甘本」	「川中島合戦図　犬甘本」	「肥前有馬陣取図　犬甘本」
表 紙 箋	「播磨採訪」	「播磨採訪」	「播磨採訪」
概　　要	手書き・着色・表紙あり	手書き・着色・表紙あり	手書き・着色・表紙あり
旧 蔵 者	「兵庫縣播磨宍粟郡安志村　犬甘政懋所蔵」	「播磨国宍粟郡安志村　犬甘政懋」	兵庫縣 犬甘政懋所蔵
備　　考	史料名：**肥前国嶋原城図**(内題)		本紙裏注記：「**笠系大成附録** 肥前有馬陣記属」

表２　東京大学史料編纂所に蔵する犬甘政懋旧蔵絵図

【註１】本稿で翻刻した「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城 受取之次第 下」（20-21 頁）を参照。なお、「画図」は「えず」と読み、「絵図」と同義である。

【註２】「笠系大成十　長次／長勝」（東京大学史料編纂所本）に寛文 8 年の島原城請取について記述した箇所があり、その末尾に「此時之始末人数帳及島原城之図載附録」とある。なおこの絵図に相当すると思われる史料は、東京大学史料編纂所の所蔵史料目録にも、『小笠原文庫目録』（福岡県立豊津高等学校錦陵同窓会 2006）にも見当たらないことから、早い時期に散逸したものと考えられる。

７．伝世

伝来した場所が播磨国宍粟郡安志村であることから、小笠原家が豊前中津藩から播磨安志藩へと領地替えとなった享保元(1716)年、絵図（または原図）もまた安志へともたらされたと考えられる。

廃藩置県当初、絵図が伝世した安志村は姫路県のうちの１ヵ村であったが、姫路県はのち、飾磨県と改称、そして明治 9(1876)年、飾磨県は兵庫県に統合されている。したがって、絵図本紙表に記される「兵庫県播磨宍粟郡安志村 犬甘政懋所蔵」という一文は、明らかに明治 9(1876)年以降に記されたものである。

絵図は、「内務省引継地図」の一部であるが、この「内務省引継地図」とは、内務省地理局が購入・寄贈・模写などを通じて蓄積した地図・絵図の一部が、明治 24(1891)年に帝国大学（現東京大学）に移管されたものを母体としている。そして、各種絵図に貼付された箋や記載事項の分析から、明治 21(1888)年に兵庫県への史料採訪が行われたことが明らかとなっている（千葉 2000,115 頁）。

明言は避けるが、内務省地理局が明治 21(1888)年に兵庫県において史料採訪を行い、その折に蒐集（あるいは模写）した絵図が明治 24(1891)年以降に帝国大学の所管となり、「内務省引継地図」として整理され、現在に至ったのではなかろうか。

６．【翻刻】寛文８年島原城請取関連史料

例　言

一、本翻刻文は、小笠原文庫 資料番号６号「笠系大成附録十九 長勝肥州島原城受取之次第 下」（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵、みやこ町歴史民俗博物館寄託）を底本とし、表表紙から墨付第２７丁まで、および末尾部分を活字化したものである。なお「笠系大成附録」とは、「深志小笠原氏の末裔である旧豊前小倉藩主小笠原家に伝わった家譜笠系大成を本伝とし、これに古文書・古記録・家臣の諸記録を附録としたもの」である（信濃史料刊行会 1975,解題）。

一、翻刻した箇所は以下の史料を収録する。

「城内え御供之覚」

「島原城引渡諸道具帳」

「弓鎗鉄砲之帳」

「武具馬具之帳」

一、底本の基本データは以下の通りである。

形態：竪帳

法量：縦 25.9cm×横 17.8 cm

構成：表表紙１丁・白紙１丁・墨付 48 丁・白紙１丁・裏表紙１丁

一、校合に用いた異本は、東京大学史料編纂所に蔵する小笠原長幹氏旧蔵本（影写本）である。

一、本翻刻文は、あくまで史料内容の概要を示したものであり、文字の大小や字配りまでも忠実に翻刻したものではない。文字の大小や字配りについては、東京大学史料編纂所ホームページにて公開されている小笠原長幹氏旧蔵本（影写本）を参照していただきたい（東京大学史料編纂所⇒検索データベース⇒所蔵史料目録データベース（Hi-CAT）⇒キーワード：笠系大成附録）。

一、「島原城引渡諸道具帳」「弓鎗鉄砲之帳」「武具馬具之帳」にはいずれも、「寛文八年四月晦日（三十日）」の日付がある。翌５月１には城付武器の引き渡しが行われているから、それに先立って高力家家老・城代より上使らへ提出されたものであろう。

一、翻刻にあたって以下の記号を用いた。

〈　〉内…史料原文に付された振り仮名または返り点による訓読。

［　］内…史料原文に記された朱書きの注記

《　》内…異本に示される文字。

（　）内…適宜翻刻者が補ったもの。

【　】内…丁数および表・裏の別。

一、平戸藩側にも同種の史料、「島原城御請取之事」が伝世し、活字化されている（平戸市史編さん委員会 2003）。

【表表紙箋】

九九－一九

【表表紙題箋】

笠系大成附録 長勝肥州島原城受取之次第 下 十九

【白紙―遊紙　１丁】

【（墨付）１丁表】

笠系大成附録 長勝肥州島原城請取次第 下 十九

【１丁裏】

（白紙）

【２丁表】

笠系大成附録　都計四十五巻

画図（えず）五枚共

長勝肥前国島原城請取之次第巻下

【２丁裏】

（白紙）

【３丁表】

笠系大成附録　　長勝

寛文八戊申年肥前国島原城御請取之次第下

「城内え御供之覚」

犬甘半左衛門

大熊十郎右衛門

秋本只右衛門

沢渡専右衛門

宮本源七

【３丁裏】

佐々木左次右衛門

武久半兵衛

小笠原次郎兵衛

前橋九郎兵衛

二木甚右衛門

小田五郎太夫
沢井藤右衛門
二木八郎兵衛
原五左衛門
原安太夫

【４丁表】

田山助之進
加藤新五右衛門
溝口兵右衛門
溝口次郎左衛門
小笠原与一郎
佐々木源右衛門
伊与久次太夫

追手門	二木八右衛門	組共二

【４丁裏】

同	二木庄左衛門	組共二
桜門	山内弥三左衛門	組共に
不明門	二木藤左衛門	組共二
門割場門カ	伊藤六右衛門	組共二
追手残	中根矢兵衛	組共二

【５丁表】

本丸残	小笠原軍兵衛	組共二
右同	陶山新五兵衛	組共二
	竹内求馬	
	光武左衛門	
	渋田見源助	
	土肥五郎左衛門	
	上条太郎左衛門	
	勝野四郎右衛門	

【５丁裏】

岩波源三郎
大池恵左衛門
渋田見平兵衛
土肥平次郎
沢渡金右衛門
小山直右衛門
山内又兵衛

土橋甚兵衛
歩者三人
【６丁表】
異本ニ右之人数之内ニあり
水町八郎右衛門
【６丁裏】
（白紙）

【７丁表】

「島原城引渡諸道具帳」

殿守（=天守）五重目

一、鐘	壱
一、畳	三拾六畳

同四重目

一、畳	弐拾八畳

同三重目

【７丁裏】

同二重目

一、壺	拾六

但、ぶどう酒　左近殿家来荒川三郎兵衛ニ渡ル

一、大釜	弐ツ
一、から（唐）紙／戸障子	百三拾五枚
一、干飯	拾壱桶
一、明大桶	壱ツ

同一重目

一、屋形之古木	色々有

【８丁表】

本丸西南角之矢倉

一、天井ぶち（縁）	八拾本
一、なげし（長押）	拾六本
一、ぬき（貫）	拾八丁
一、かも（鴨）井	五本
一、よせ（寄）敷居	九丁
一、棚《椚》板	弐枚
一、板	少
一、瓦	少

本丸西之三階矢倉

【８丁裏】

一、あらめひじき（荒布・鹿尾菜）　六百俵

一、かご（鹿児）の皮　弐拾把

一、炭　六拾俵

一、ふのり（布海苔）　四丸

一、敷居かもゐ（鴨居）　三拾丁

　本丸西北之角矢倉

一、明壺　九ツ

一、庭籠かなあミ（金網）　拾枚

一、明櫃　大小五ツ

一、鉄のさほかね（竿金）　拾九本

【９丁表】

一、唐木雑木（からき・ぞうき）　色々有

　本丸北之二階矢倉

一、指物竿　百五拾本

　本丸北之中二階矢倉

一、麻がら（幹）　百束

一、ふすま（襖）障子骨　三拾本

　本丸北東之矢倉

一、わり（割）木　弐百束

一、ひし（菱）　八俵

　本丸東南之三階矢倉

【９丁裏】

一、材木　色々有

　本丸東北之三階矢倉下細工所

一、指物竿　三拾束

　但、五拾本詰

一、大竹　拾九本

　本丸北東之多門

一、鉄之かゞり（篝）籠　五ツ

一、行灯之台　三ツ

一、たい松（松明）　少

　本丸廊下橋右之門

一、鉄炮掛　六ツ

【１０丁表】

一、ぬか（糠）味噌　五拾俵

一、塩　四俵　但、小俵

一、鑓掛　三組

一、あらめひじき（荒布・鹿尾菜）　八拾俵
　　廊下橋
一、引物　壱本
一、やぎ　弐ツ
一、かも井　六丁
　　二之丸西之多門
一、手木（てぎ）・しゆら（修羅）・石棒・車　色々有
【１０丁裏】
一、苧（苧）綱（おづな）　四筋
　　二ノ丸石火矢倉
一、石火矢之台　八ツ
一、大太鼓　壱ツ　但、太鼓矢倉有
一、鉄炮古雨覆（あまおおい）　三ツ
一、町縄　壱口半
一、砂入箱　壱ツ
一、緒わらぢ（草鞋）　四拾束
一、から（唐）笠（傘）　五拾九本
一、具足明箱　廿七
【１１丁表】
一、紙之雨鞍覆　六十
一、鞍掛　三十
　　右之分、所々ニ有
【１１丁裏】
　（白紙）

【１２丁表】

「弓鎗鉄炮之帳」

一、百張　二之丸東二階櫓　弓白重藤（しらしげどう）弦共ニ
　内五拾張ハ塗籠
一、弐拾張　右同所ニ有　弓色々弦共ニ
一、百八拾　右同所ニ有　靱（うつぼ）
　内　百ハ黒塗朱之丸、五拾ハぶとう（葡萄）蒔絵
　　三拾ハしかり毛
一、百五拾　右同所ニ有　尻籠（しこ）
【１２丁裏】
一、六千三百本　右同所ニ有　数矢羽（やばね）色々
一、八千弐百五拾本　右同所ニ有　矢之根色々

一、弐拾四荷　　右同所ニ有　　矢櫃（やびつ）
一、三百拾三本　　二之丸之内武具部屋　　数鎗打柄さや（鞘）鳥毛（とりげ）
　内廿本ハ棒さや、同五本愛津番所ニ有
一、百九拾本　　太鼓櫓ニ有　　数鑓笛巻（ふえまき）さや（鞘）鳥毛
一、百本　　廊下櫓脇門櫓ニ有　　同柄黒塗太刀打金薄（きんぱく）さや鳥毛
【１３丁表】
一、五拾本　　二之丸武具部屋　　同柄青貝（あおがい）さや（鞘）色々
一、百四拾四本　　右同所ニ有　　同柄色々
　内　弐本ハ十文字、三本ハ片鎌
一、五拾本　　右同所ニ有　　同片鎌（=片鎌槍）さや（鞘）黒塗
一、五拾本　　右同所ニ有　　鑓之さや袋赤はれ板（いた）
一、百拾本　　二之丸東二階矢倉ニ有　　天草鑓之柄荒木取
一、百三拾振　　二之丸武具部屋ニ有　　長刀　但、さや袋赤はれ板（いた）
【１３丁裏】
　内三拾ハ袋なし
一、拾八挺　　石火矢大小
　内
　四挺ハ　　六百目筒　　台敷板小道具共ニ二之丸石火矢蔵ニ有
　壱挺ハ　　三百目筒　　右同所
　壱挺ハ　　弐百五拾目筒　　右同所
　壱挺ハ　　百目筒　　右同所
　壱挺ハ　　四拾目筒　　右同所
　弐挺ハ　　三百目筒　　二之丸鉄（くろがね）門ニ有
　壱挺ハ　　弐百目筒　　右同所
【１４丁表】
　弐挺ハ　　百目筒　　右同所
　壱挺ハ　　弐百目筒　　右同所
　壱挺ハ　　百五拾目筒　　右同所
　三挺ハ　　百目筒　　右同所
一、八百五十　　二之丸石火矢蔵ニ有　　石火矢之玉大小
一、三挺　　二之丸東二階櫓ニ有　　木石火矢台共ニ
一、八拾壱挺　　異風玉目大小作り色々
　内弐拾九挺ハ太鼓櫓ニ有、五拾弐挺ハ西堀端之櫓ニ有
【１４丁裏】
一、三拾挺　　二之丸東二階櫓ニ有り　　中長筒玉目大小作り色々
一、拾　　右同所　　右之台
一、八拾壱挺　　西堀端之櫓ニ有　　持筒玉目大小作り色々長短有
一、千弐百七拾弐挺　　数筒玉目大小作り色々

内　四百四拾七挺ハ太鼓櫓ニ有、四百三拾挺ハ二之丸東二階櫓ニ有
　　三百九拾挺ハ二之丸武具部屋ニ有、五挺ハ愛津番所ニ有
一、三百三拾　　二之丸武具部屋ニ有　　数筒袋赤はれ板（いた）
【１５丁表】
一、五拾壱　　右同所ニ有　　持筒袋黒はれ板（いた）
一、百三拾壱　　右同所ニ有　　数筒之革袋金之段々
一、拾五　　西堀端之櫓ニ有　　持筒雨覆はりぬき（張抜）青漆金紋
一、三拾七　　右同所ニ有　　鉄炮袋木綿島（=木綿縞）色々
一、五百九拾五　　二之丸武具部屋ニ有　　鉄砲之雨覆　但、紙
一、拾九万千九百五拾六　　鉛玉鉄玉大小
【１５丁裏】
内　拾五万弐千五百ハ鉄玉、壱万三千七百三拾壱ハ鉛玉　東門櫓ニ有
　　弐千三百七拾九ハ鉛玉　東三階櫓ニ有
　　弐万三千三百四拾六ハ鉛玉　二之丸武具部屋ニ有
一、九千弐百五拾五　　東門櫓ニ有　　銅玉大小
一、五万六千弐百三　　右同所ニ有　　白目玉大小
一、拾　　西堀端之櫓ニ有　　玉薬入候筒ためぬり（溜塗）
一、五　　右同所ニ有　　右之袋はれ板（いた）花色
【１６丁表】
一、千百拾　　どうらん（胴乱）
内　八百拾ハ二之丸東二階櫓ニ有　弐百九拾五ハ
　　二之丸武具部屋ニ有　五ツハ愛津番所ニ有
一、千四百六拾　　口薬（くちぐすり）入色々
内　四拾ハ西堀端櫓ニ有、千四百弐拾ハ東三階櫓ニ有
一、百七拾　　尺八合色々
内　四拾九、内四拾五ハ尺八合、四ツハ亀甲　西堀端櫓ニ有
　　百弐拾壱ハ　二之丸武具部屋ニ有
【１６丁裏】
一、弐千筋　　木綿火縄
内　千三百八拾筋ハ二之丸東二階櫓ニ有
　　六百弐拾筋ハ二之丸武具部屋ニ有
一、壱万千七拾三筋　　東三階櫓ニ有　　竹火縄
一、千三百拾　　二之丸武具部屋ニ有　　玉袋革麻色々
一、九百七拾三貫目　　合薬　但、風袋共ニ
内　三百六貫九百五拾三匁五分ハ　殿守前土蔵ニ有
　　六百六拾六貫四拾六匁五分ハ　東三階櫓ニ有
【１７丁表】
一、六百九拾貫百五拾目　東三階櫓ニ有　　白塩硝　但、風袋ともニ

一、四百五拾四貫百七拾目　右同所ニ有　　硫黄　但、風袋ともニ
一、六拾五荷　　玉薬箱色々
　内　三拾六荷ハ東三階櫓ニ有、弐拾九荷ハ二之丸武具部屋ニ有
一、五拾弐　　二之丸武具部屋ニ有　　玉薬箱革之覆
一、六拾八　　右同所ニ有　　玉薬箱雨覆、但紙
一、弐百七拾　　右同所ニ有　　鉄砲肩当なめし革
【１７丁裏】
一、百弐拾　　右同所ニ有　　鋳形色々
一、五拾　　右同所ニ有　　鋳鍋（いなべ）
一、六百弐拾六貫六百五拾目　東門櫓ニ有　　鉛　但、風袋ともニ
一、百九拾五　　東三階櫓ニ有　　ほうろく（炮録）火矢
一、百本　　右同所ニ有　　大国（たいこく）火矢
　但、筒九拾八あり
一、百九拾　　右同所ニ有　　火矢
【１８丁表】
一、弐長持　　右同所ニ有　　竹早合（はやごう）
一、三　　東門櫓ニ有　　薬研（やげん）
一、弐拾六枚　　東三階櫓ニ有　　合薬（ごうやく）乾〈ホシ〉台
一、百弐拾五　　右同所ニ有　　合薬通箱
一、六　　右同所ニ有　　半切桶大小
一、六　　右同所ニ有　　薬ふるひ大小
【１８丁裏】
一、壱　　右同所ニ有　　玉切台共ニ
一、壱枚　　右同所ニ有　　鉄楯
一、三拾七　　廊下橋門番所ニ有　　楯板

　右之通相違無御座候　已上

［高力殿家老］板倉十兵衛
［同］板倉久兵衛
【１９丁表】
　寛文八年戊申四月晦日　　［同］宮川久左衛門
［同］三浦土左衛門
［同］野沢瀬兵衛
［城代］板倉五平次
［同］朝夷名半右衛門

【１９丁裏】

「武具馬具之帳」

一、三拾七	二之丸武具部屋ニ有	昇
一、三拾九	右同所ニ有	吹なかし（流し）
一、弐拾	右同所ニ有	金之切さき（裂）
一、四拾本	右同所ニ有	昇竿横手共ニ
一、四拾三本	右同所ニ有	同請筒
【２０丁表】		
一、弐	右同所ニ有	円居〈マトイ〉
一、弐拾本	右同所ニ有	唐団（とううちわ）
一、弐本	右同所ニ有	小馬印鳥毛
一、千	右同所ニ有	弐本指物四半　但、緒白丸付
一、五百弐拾本	右同所ニ有	弐本指物鳥毛
一、五百三拾本	右同所ニ有	弐本指請筒
【２０丁裏】		
一、弐	右同所ニ有	押太鼓
一、三拾六領	右同所ニ有	数具足色々
一、五拾領	二之丸鉄門之上二階櫓ニ有	歩行具足
一、八百弐拾領	右同所ニ有	番具足
一、六百九拾八	右同所ニ有	金笠
一、七百	二之丸武具部屋ニ有	弓小手木綿筋有
一、拾壱走	右同所ニ有	布幕、紋木瓜
【２１丁表】		
一、壱走	右同所ニ有	木綿幕紺、紋右同
一、壱走	右同所ニ有	同幕紺、紋鳩文字
一、七走	右同所ニ有	同幕紋色々
一、五拾本	右同所ニ有	幕串（まくぐし）
一、百三拾	右同所ニ有	具足羽織白はれ板（いた）　但、ひの丸有
一、四拾	右同所ニ有	同羽織白唐木綿　但、ひの丸有
【２１丁裏】		
一、六拾	右同所ニ有	羅せ（背）板羽織　但、ひの丸付
一、拾壱口	右同所ニ有	鞍黒塗紋色々
一、七口	右同所ニ有	同梨地紋なし
一、七口	右同所ニ有	同惣青具《貝》紋なし
一、拾四口	右同所ニ有	同梨地紋色々
一、五口	右同所ニ有	責鞍切付馬肌共ニ 古シ
【２２丁表】		
一、三	右同所ニ有	高麗馬氈（ばせん）

内　弐ツハ天鷲絨　壱ツハ猩々皮

一、壱口　右同所ニ有　高麗鞍山形鮫

一、壱掛　右同所ニ有　同泥障（あおり）

一、壱掛　右同所ニ有　同かな（鉄）鐙

一、壱口　右同所ニ有　同轡

一、壱口　右同所ニ有　高麗鞍　但、山形青具《貝》切付馬肌共ニ

【２２丁裏】

一、壱掛　右同所ニ有　同かな（鉄）鐙

一、壱口　右同所ニ有　同轡

一、九掛　右同所ニ有　ころく（五六=五六掛）鐙

内　六掛ハ惣青具《貝》、壱掛ハ黒塗紋有、弐掛ハ黒塗紋なし

一、三拾三掛　右同所ニ有　かな（鉄）鐙象眼色々

一、五掛　右同所ニ有　責鐙、古シ

一、三拾六口　右同所ニ有　轡

内　三拾四口ハ十文字、二口ハ桐

【２３丁表】

一、拾弐口　右同所ニ有　切付馬肌

一、三拾五掛　右同所ニ有　力革（ちからがわ）

一、七拾五口　右同所ニ有　野沓

一、壱掛　右同所ニ有　泥障（あおり）熊

一、三掛　右同所ニ有　同織熊

一、三拾壱掛　右同所ニ有　同なめし革

【２３丁裏】

一、七拾口　右同所ニ有　塩手

一、拾八掛　右同所ニ有　押掛（おしかけ）色々

一、三拾弐掛　右同所ニ有　押掛色々、古シ

一、六拾掛　右同所ニ有　手助

一、拾四筋　右同所ニ有　手縄腹帯

一、四拾六筋　右同所ニ有　手縄腹帯、古シ

一、拾弐筋　右同所ニ有　三尺縄

【２４丁表】

一、四拾六本　右同所ニ有　鼻ねぢ

一、七拾六本　右同所ニ有　馬柄杓（まびしゃく）

一、拾九疋分　右同所ニ有　立具

一、三拾疋分　右同所ニ有　旅立具

一、三拾九筋　右同所ニ有　腹懸縄

一、弐拾筋　右同所ニ有　追縄

【２４丁裏】

一、四筋　　右同所ニ有　　口取縄
一、五百九拾壱　　右同所ニ有　　帷子紺かふちらし（散らし）
一、弐百拾三　　右同所ニ有　　同花色筋有
一、百四拾九　　右同所ニ有　　同花色もち（餅=黒餅カ）ちらし（散らし）
一、九拾壱　　右同所ニ有　　同梯《柿》もちちらし（散らし）
一、四百三拾六　　右同所ニ有　　木綿単物地紺かふちらし（散らし）
【２５丁表】
一、六百弐拾　　右同所ニ有　　同単（ひとえ）羽織かき水色もちちらし
一、弐百六拾七　　右同所ニ有　　同単（ひとえ）羽織花色もちちらし
一、百弐拾弐　　右同所ニ有　　同単（ひとえ）羽織花色筋有
一、四拾五　　右同所ニ有　　同単（ひとえ）羽織染色々
一、四百五拾　　右同所ニ有　　木綿股引
一、五百　　右同所ニ有　　同脚半染色々
【２５丁裏】
一、九百五拾　　右同所ニ有　　うちかい（打飼）袋木綿染色々
一、弐拾　　右同所ニ有　　挟箱、覆共ニ
一、六　　右同所ニ有　　ミの（蓑）箱
一、七　　右同所ニ有　　銅鍋組入（くみいれ）
一、百丁　　右同所ニ有　　熊手
一、百丁　　右同所ニ有　　鎌
【２６丁表】
一、六荷　　右同所ニ有　　笠合羽箱
一、拾九　　右同所ニ有　　腰桶
一、拾五　　右同所ニ有　　吸筒（すいづつ）　口之金物なし
一、弐小屋分　　二之丸鉄門之上櫓ニ有　　野陣（のじん）道具
一、四拾五　　二之丸武具部屋ニ有　　旅具足櫃
一、弐拾五筋　　右同所ニ有　　手縄木綿打緒
【２６丁裏】
一、弐拾筋　　右同所ニ有　　同麻
一、拾壱口　　二之丸鉄門之上櫓ニ有　　荷鞍

右之通相違無御座候　已上

板倉十兵衛
寛文八年戊申四月晦日　板倉久兵衛
宮川久左衛門
三浦土左衛門
野沢瀬兵衛

【２７丁表】

板倉五平次

朝夷名半右衛門

右終

異本ニ右之外有之分

一、弐万石　　米

一、五拾貫目　　銀

一、三百五拾貫文　　銭

【２７丁裏】

（白紙）

（略）

【４７丁表】

右島原城請取上下巻諸役各加其名之上〈右、島原城請取上下巻、諸役おのおの其の名の上に加る者は、今に之を考へ附所也。其の余は古書の如く之を写す。〉
者今所考附之也其余者如古書写之

【４７丁裏】

宝永二年乙酉春撰定之

【４８丁表】

（白紙）

【４８丁裏　紙背】

嘉永四年辛亥年四月日

臣

辻 宇助信英 謹書

【白紙―遊紙　１丁】

【裏表紙】

７．参考史料・文献

【参考史料】

「御在城割場御人数建場絵図」（本光寺常盤歴史資料館蔵、本光寺文書３号）。※島原市教育委員会(2016)111 頁に写真掲載。
「島原城下図」（本光寺常盤歴史資料館蔵、本光寺文書 789 号）。※『島原城下図本稿稿』④「島原城下図」に写真掲載。
「島原城廻之絵図」（熊本県立図書館蔵、チエ 352）。※島原市教育委員会(2016)126 頁に写真掲載。
「嶋原之城図」（国立国会図書館蔵、本別 20-1〔日本古城絵図〕西海道之部(1).322）。※島原市教育委員会(2016)114 頁に写真掲載。
「播磨安志 小笠原家譜」（東京大学史料編纂所蔵、請求記号 4175-571）。※所蔵史料目録データベースにて公開（2019 年７月５日現在）。
「肥前国嶋原城図」（東京大学史料編纂所蔵、内務省引継地図 0340）。本号所収。
「肥前島原之城図」（長崎歴史文化博物館蔵、3 162-1）。※近世絵図地図資料研究会(2003)通番 03007-8 に収録。
「本朝城絵図」（東京大学史料編纂所蔵、S 貴 23-1）。※所蔵史料目録データベースにて公開（2019 年７月５日現在）。
「笠系大成十　長次／長勝」（東京大学史料編纂所所蔵、請求記号 4175-1357）。※所蔵史料目録データベースにて公開（2019 年７月５日現在）。
「笠系大成附録十八 長勝肥州島原城受取之次第 上」（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵、小笠原文庫６号）。
「笠系大成附録十九 長勝肥州島原城受取之次第 下」（福岡県立育徳館高等学校錦陵同窓会蔵、小笠原文庫６号）。

【参考文献】

入江濬『島原の歴史』藩制編（島原市役所、1972 年）。
太田諒一「天祥公島原城請取出陣」『平戸史談』７号（平戸史談会、1978 年）。
岡山大学附属図書館『平成 22 年度 池田家文庫絵図展 絵図にみる中国四国地方の城下町』（岡山大学附属図書館、2010 年）。※山陽三ヶ城の請取絵図を収録。
川添昭二ほか『黒田家譜』第二巻（文献出版、1982 年）。
経済雑誌社『続国史大系』（経済雑誌社、1902 年）。
国書刊行会編『続々群書類従』第十二（続群書類従完成会、1970 年）。
佐藤宏之「城の受け取りと武家の財 近世の城、その構成要素」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 182 集（国立歴史民俗博物館、2014 年）。
信濃史料刊行会『新編信濃史料叢書 12　勝山小笠原文書』解題４頁（信濃史料刊行会、1975 年）。
島原市教育委員会編『島原藩日記　巻一』（島原市教育委員会、2008 年）。
島原市教育委員会編『島原藩日記　巻二』（島原市教育委員会、2010 年）。
島原市教育委員会編『島原藩日記　巻三』（島原市教育委員会、2011 年）。
島原市教育委員会編『島原藩日記　巻五』（島原市教育委員会、2013 年）。
島原市教育委員会編『島原市文化財調査報告書』第 16 集　森岳城跡石垣調査報告書（島原市教育委員会、2016 年）。
千葉真由美「「内務省引継地図」における印と地図史料の収集・整理」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 10 号（東京大学、2000 年）。
千葉真由美「皇国地誌編纂過程における地図目録と地図主管の移動ー東京大学史料編纂所所蔵「内務省引継地図」と関連地図目録の検討からー」『東京大学史料編纂所研究紀要』第 14 号（東京大学、2004 年）。
長屋隆幸「17 世紀中期の城受け取りと大名の軍役への意識―平戸藩による島原城を事例に―」『城館史科学』第７号（城館史科学会、2009 年）。
長屋隆幸『近世の軍事・軍団と郷士たち』（清文堂出版、2015 年）。
西田博「肥前浜城と島原城下町の復元的考察」（私家版、2017 年 a、九州大学学術情報レポジトリにて公開）。
西田博『島原城下絵図翻刻稿①「肥前国島原之城」』（私家版、2017 年 b）。
西田博『島原城下絵図翻刻稿②「筑前筑後肥前肥後探索書」』（私家版、2018 年 a）。
西田博「島原城下絵図翻刻稿③「肥前国高来郡島原城図」―付 五社宮・三社宮について―」（私家版、2018 年 b）。
西田博「島原城下絵図翻刻稿④「島原城下図」（私家版、2019 年）。
野村義文『島原半島町村変遷史』（出島文庫、2003 年）。
林銑吉編『島原半島史』下（長崎県南高来郡市教育会、1954 年）。
平戸市史編さん委員会「史料紹介　島原城御請取之事」『平戸市史研究』第８号（平戸市史編さん委員会、2003 年）。
廣田昌一呂「肥前松浦氏による島原城受け取り―「島原城請取之節之書」に見る城受け取りの実際―」『談林』第 58 号（佐世保史談会、2017 年）。
福岡県立豊津高等学校錦陵同窓会『福岡県指定文化財 小笠原文庫目録』（福岡県立豊津高等学校錦陵同窓会、2006 年）。

８．あとがき

2017 年 6 月、『肥前浜城と島原城下町の復元的考察』という小文を発表した（九州大学学術情報レポジトリに登録）。稿を進めるなかで、島原城下絵図について若干の知見を得ることができたが、その知見をまとめたのがこの「島原城下絵図翻刻稿」シリーズである。

今回の史料調査・撮影・掲載にあたっては、東京大学史料編纂所の方々、ならびに福岡県みやこ町教育委員会生涯学習課文化係（歴史民俗博物館）木村達美先生に大変お世話になった。特に木村先生には調査後の問い合わせに対しても懇切丁寧な回答をいただき、大変恐縮している。記して深謝申し上げたい。

タイトルに「稿」とあるように、これはあくまで未完稿である。そして筆者は、島原学については甚だ初心者である。無知による錯誤・誤謬も多々あるかと思う。先学諸賢のご批判・ご叱正を得て、「稿」の一文字を削除することが出来れば、と切に願っている。

（にしだ・ひろし　〒854-0074　長崎県諫早市山川町 18－4）

島原城下絵図翻刻稿シリーズ

①「肥前国島原之城」（長崎歴史文化博物館）
②「筑前筑後肥前肥後探索書」（長崎歴史文化博物館・東京大学史料編纂所）
③「肥前国高来郡島原城図」―付　五社宮・三社宮について―（佐賀県立図書館）
④「島原城下図」（本光寺常盤歴史資料館）
⑤「肥前国嶋原城図」―付 寛文８年島原城請取関係史料―（東京大学史料編纂所）

書名読み：しまばらじょうかえず・ほんこく・こう・ご・ひぜんのくにしまばらじょうず・つけたり・かんぶんはちねん・しまばらじょう・うけとりかんけいしりょう